

中島岳志著

『ナショナリズムと宗教』

—現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動』

上田知亮

I はじめに

1992年のバーブリー・マシッド破壊事件と1998年の核実験断行を大きな契機として、インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズム（以下HN）が注目を集め、これまで数多くのHN研究が公表されてきた。しかしHN運動の歴史やイデオロギーは詳細に検討されてきたものの、その活動の実態は殆ど知られていなかった。こうした欠落を埋めるべく、HN運動の中心的組織たる民族奉仕団（以下RSS）を対象に精力的なフィールドワークを行った政治人類学的成果が、著者の前著『ヒンドゥー・ナショナリズム——印パ緊張の背景』（中公新書ラクレ、2002年）である。ともすれば、暴力的で過激な狂信者といった先入観だけで捉えられがちなRSSメンバーの実態に迫った点で、前著は画期的なものであった。

II 本書の構成と内容

本書は、一般向けのルポルタージュ的な記述に徹した前著で提示した問題を、その後の参与観察の成果を踏まえて学術的に論じたものである。本書の構成は以下の通りである。前半3章は文献に基づく政治学的分析による総論であり、後半3章はフィールドワークに基づく人類学的手法による各論に相当する。

はじめに

第1章 公共圏・ナショナリズム・宗教

第2章 ヒンドゥー・ナショナリズムの歴史

第3章 ヒンドゥー・ナショナリズム運動の組織と理念

第4章 身体のパリテックス

第5章 サバルタンの公共性とヒンドゥー・ナショナリズム

第6章 ヒンドゥー・ナショナリズムと暴力
おわりに

以下ではまず章ごとの要点と若干のコメントを記す。

第1章では、政治学における世俗化パラダイムと、HN研究における実証的研究やイデオロギー分析への偏重とが批判的に検討され、HNイデオロギーの受容層側が繰り広げるアイデンティティの政治に着目する必要性が主張されている。その際、中間層だけではなく「民衆の善き生の追及や、宗教復興の心性の高まり」（71ページ）をも視野に入れ、末端活動員や民衆の主体性に注目するという著者の研究姿勢が表明されている。こうした議論を著者は、「ソト／ウチ」論や「多一論」（宗教的多元主義）に基づいて展開しているが、この点は本書全体の評価に関わるので、後述することとする。

第2章では、HNが誕生し抬頭してきた歴

史的文脈を明らかにするため、インド近現代政治史が概観されている。HN 政党であるインド人民党 (BJP) が 1980 年代以降に躍進した要因として、特にラジーヴ・ガンディーの軽率なポピュリズム政治と、経済自由化に伴う大衆消費文化の流入との影響が指摘されている。ただし経済動向を説明する際に、経済統計データや世論調査などの数値が殆ど用いられていないことに、やや物足りなさを感じた¹⁾。HN 抬頭の説明変数が国内要因にやや偏重しており、国外要因の記述が薄いことも惜しまれる。「冷戦崩壊による価値の流動化、隣国中国の勢力拡大、イスラーム諸国におけるイスラーム復興気運の高まり」(124 ページ) が HN の拡大を助けたという指摘は極めて示唆的だけに、それ以上議論されていないのが残念である。また在外インド人の経済支援の重要性が指摘されているが、その具体的な説明が殆どないことも、近年この分野の研究が進展していることを考えると、非常に惜しまれる。

第 3 章では、HN 運動を主導する RSS とその関連諸団体の組織体制と、HN の唱える理念やイデオロギーとが解説されている。サンスクリット文化に基づくバラモン中心の国民統合を進めるべく HN のイデオログが提示する、独自のヒンドゥー概念や世俗主義論などが特に詳しく紹介されている。望蜀ではあるが、RSS 内部の権力・権限関係や RSS 指導者の具体的なキャリアパスが検討できれば、より興味深いものとなったであろう。

第 4～6 章は、HN 運動の実態を末端メンバーの主体に焦点を据えて解明している。第 4 章では、RSS の中心的活動である末端レベルでのトレーニング活動 (シャーカール) が、メンバーの身体を動員可能な国民的身体に変

容させる規律権力として作用していることと、末端リーダーが RSS の公式イデオロギーの単純な伝達者ではなく、自己の価値基準に従って主体的に選別している姿が描写されている。シャーカールの実態にこれほど微細に迫った研究は世界的にも殆ど類例がなく、それだけでも特筆に値する。しかし、内部のエリート主義に反発してシャーカールに参加しなくなった者でも、HN への共感を失っておらず、シャーカールの減退傾向は HN 運動全体の減退を意味しないという結論部の叙述が気に掛かった。HN のエリート主義を嫌悪したにも拘らず依然それに共感を覚えているのは何故か、シャーカールの減退が HN 運動の減退を意味しないなら、第 4 章での詳細な検討は結局如何なる意義があるのかの 2 点について、十分な説明がないからである。シャーカールに参加しなくなった者と HN 運動とのその後の関わり方まで詳しく論じて欲しかった。

第 5 章では、HN 団体のスラム街でのボランティア活動を対象として、末端活動員が必ずしも HN に共鳴している訳ではなく、自己の倫理観に従って活動していることが描写されている。さらに、スラムの住民が自らの生活を守るために HN を戦略的に馴致している一方で、デモや集会に参加することで HN 運動を根底で支える存在として利用されてもいる実情や、住民に宗教復興的価値観が芽生えるとともに、ムスリムを他者として排除する意識も醸成されている実態など、事態の明暗両面がバランスよく活写されている。だが敢えて言うと、著者は「自分のスラムを良くする」という動機と生活戦術を高く評価しているが、複数のスラム間での利益背反という問題や、ある住民の自己利益追求がよりマクロなレベルでの利益を損ない、結果として当該

住民の利益も損なわれるという、「合成の誤謬」問題まで視野に入っていない憾みがある。1つのスラムだけで議論を完結させず、複数の公共圏の対立まで射程に入れ、例えば都市行政などの「エリートの公共性」と具体的に对比していれば、著者の説く「サバルタンの公共性」²⁾の意義がより鮮明になったと思われる。

第6章では、様々な暴動事件の実行部隊である青年組織のメンバーの政治集会やデモにおける振る舞いなどを分析し、彼らが主催者の意図に反して集会やデモを攪乱したり、暴力的な社会的逸脱行為を行うことで、アイデンティティを模索していることが明らかにされている。欲を言えば、非ヒンディー語地域出身のメンバーが、ヒンディー語の標準語化を唱えるHN運動に参加する動機にまで議論を進めていけば、近年の南インドにおけるHNの伸長を理解するうえで、非常に有益でより示唆に富む内容になったと感じた。

Ⅲ 評価と批判

本書の最大の貢献は、従来の研究において殆ど無視されてきた、HN運動を底辺で支える支持層の論理と心理を、綿密なフィールドワークによって描出した点にある。多くの先行研究では、HNイデオロギーを受容する側の動機が、国政の動向や経済情勢といったマクロな要因のみに帰着されており、活動家個人の欲求や地域住民の生活戦略などマイクロな要因にまで掘り下げてHN躍進の要因を深く究明した試みは、本書が初めてと言ってよい。

さらに第4～6章で幾度も指摘される、指導者と支持者との間での意図やイデオロギーの齟齬という問題は、非常に重大な政治学的意義をもつ。ある政党や政治運動が支持を獲

得したとき、それが標榜するイデオロギーや政策などが指導者の意図通りに解釈・受容されたうえで支持されていると、無批判に想定されていることが多い。だが実際には、人々は提示されたイデオロギーや政策を自分の置かれた状況のなかで解釈し（ときには誤解しながら）評価したうえで、取捨選択しているのである。こうした政治的支持の付与と獲得の因果関係をマイクロな視点から厳密に吟味する本書の視点は、極めて示唆に富んでいる。

他方で、『ナショナリズムと宗教』という題名から受ける印象とは異なり、宗教とナショナリズムが結び付く論理への関心は比較的稀薄である。著者は、宗教とナショナリズムとは根本的には対立し、ナショナリズムと結び付いた宗教はその墮落形態であって、HNは「擬似宗教イデオロギー」にすぎないと切り捨てている。つまり著者の中心的関心は、宗教ナショナリズムではなく、それとは対極的な（だが、しばしばそれに利用されてしまう）宗教復興にこそあり、本書の主要課題は、近代や植民地主義を（さらにはナショナリズムをも）乗り越える宗教復興的要素をHN運動のなかに見出すことなのである。

したがって、宗教復興に関する著者の議論を検討することが、本書への批評として最も適当であろう。以下では特に問題設定と論証について検討する。問題設定に関してはソト／ウチ二元論の適用については「善き生の追求」と宗教の関連性について、それぞれ2点ずつ疑問点を述べる。浅薄な理解故の的外れな批判かもしれないが、敢えて臆せず陳べることで評者の義務を果たしたい。

最初に、本書の問題設定の柱であるソト／ウチ二元論の適用の仕方について疑問を呈したい。まず気に掛かったのは、インド人が政

治や経済など物質的領域（「ソト」の領域）での活動を著しく制約された植民地支配下で、宗教や文化など精神的領域（「ウチ」の領域）がインドの本質的領域と考えられた一方で、ソトの領域はイギリスの担うべき領域とされたという、バルタ・チャタジーのソト／ウチ二元論を不用意に現代インドにまで適用しており、独立後のインド人の主体性を軽視しているのではないかという点である。言わば、現代インドの抱える諸問題を全て植民地統治に帰するポストコロニアリズム的還元論に陥っているという印象を免れなかった。現代インドの「植民地的差異の構造」の継承という問題は、国民統合とカースト政治や宗派対立などが絡んでおり、もっと踏み込んだ検証が必要であろう。公私の「倫理の分断」が政治腐敗の原因であると多くのインド人が考えていることを、「倫理の分断」の実例として著者は記述している（71ページ）。だがこれは事実と認識を混同した議論であり、独立インドの深刻な政治腐敗の原因を厳密に特定するならば、政治制度や経済体制も独立変数として議論したうえで、植民地経験のない国とも比較せねばならないであろう。さらにチャタジー自身の分析対象である植民地期に限定しても、インド自治に関しては英印双方に様々な議論があり、実際にも統治機構の「インド化」が着実に進んだことを考慮すると、あまりにも明快なソト／ウチ二元論の適用にはもう少し慎重であってもよかったのではないだろうか。

問題設定に関する第2の疑問点は、ソト／ウチと公／私の「二重の深淵構造」を克服するものとしてHN運動を位置づける議論に対してである。著者はソトの領域と公の領域（公共圏）を同一視し、HN運動の一部を「植

民地支配によって分断された自己の善と公の正義を再統合」（49ページ）するものと評価している。だがチャタジーのソトの領域と現代政治理論の公共圏とでは、包含する範囲が大きく異なっており、著者の挙げる医療活動や教育活動などは、後者には含まれても前者に該当するとは思われない。そのため、「善と正義の再統合」に関する著者の議論はやや腑に落ちなかった。ソト／ウチの境界と公／私の境界との違いに十分注意が払われていないことで、ウチの領域に属する宗教が公の領域で果たす役割が過大評価されることにもなっていると思われる。この点は以下で述べる、「善き生の追求」によって宗教復興を論証することの問題点とも深く関連している。

次に、宗教復興の論証について2点疑問を述べる。第1に、宗教復興の心性が現代インドでどの程度強まっていると言えるのか、本書を読むだけでは把握しづらいと感じた。地域やカースト、宗教、居住地域（都市／農村）、性別、所得などによって宗教復興の進展度が異なるのかという重大な問題が未解明であることに加えて、著者が重視する「善き生の追求」という漠然とした指標が、そもそも宗教復興の説明項としてどこまで有効なのか判断としないことが、その理由であると思われる。イスラーム復興に関する研究と比較するなどして本書の分析手法の有効性がより詳細に説明してあれば、説得力が増したであろう。

第2に、「善き生」を追求することはどこまで宗教的な活動なのかという疑問を感じた。これは第1の疑問点についてさらに踏み込んで考えたとき生じる疑問である。著者は「善き生」を追求する末端活動員や民衆の姿に宗教的心性を見出しているが、それを「宗教的」と形容するのは必ずしも適当であると

は限らない。著者の持論である「多一論」を徹底するならば、宗教も政治や経済と同じく多元性のなかの一次元と捉えるべきであろう。政治や経済も、宗教とは手段が異なるものの、人間の生を改善し、人々に安寧と幸福を提供するという根本目的は同じである。政治や経済など宗教以外の領域でも「善き生」が追求できることを、著者は軽視しすぎているように思われる。倫理的活動を宗教と結び付ける必要は必ずしもなく、本書が描く「善き生」の追求も、宗教復興と直結させるには議論の余地があろう。宗教的ではない倫理が専門領域ごとに存立し得ると考える評者が、あるいはあまりに世俗主義的で近代主義的なのだろうか。

こうした疑問を本書の題名にもある「ナショナリズムと宗教」の関係に絡めて、今後の課題を2つ提起したい。第1は、HNの支持者は「宗教（ヒンドゥー教）」と「ナショナリズム」のどちらに比重を置いて支持しているのかという問題である。支持者はHNをどの程度「宗教的」なものとして認識して支持しているのだろうか。換言すれば、支持者の側からみてもHNは宗教ナショナリズムと捉え得るのだろうか。本書が指摘するHN運動の複雑さは、HNと呼ばれる現象が実は「宗教」ナショナリズムではない側面を、さらにはナショナリズムですらない側面を濃厚に備えていることを示唆しているように思われた。

第2の課題は、著者が肯定的に評価する宗教復興と、否定的に捉える宗教ナショナリズムとは、表裏一体の関係にあると考えるべき

ではないかという問題である。著者は両者を峻別しているが、特に第5、6章を読む限りでは、功罪合わせた多面的な性格をもつ宗教ナショナリズムの一面が宗教復興という現象であると捉えた方が生産的であるように思われた。HN研究では、排他的意識を醸成するというナショナリズムの負の側面が強調されがちであるが、それと同時に連帯意識を涵養する正の機能をも視野に入れることで初めて、宗教とナショナリズムが結びつくことの意味がより奥深く把握できるのではなかろうか。

以上のような疑問を感じたものの、本書は疑いもなく第一級のHN研究である。さらに、現代政治を対象とした先駆的な政治人類学の成果として、人類学者に豊かな研究領野を示唆すると同時に、政治学者に魅力的な分析方法を提示している、貴重な業績でもある。

最後に実際的な注文を述べておきたい。本書は和書では初めての（そして出版から2年近く経った本書評執筆時点でも依然唯一の）専門的なHN研究書であり、多くの研究者が繰り返し参照すべき好著であるだけに、索引が付いていないのが甚だ残念である。

(注)

- 1) 同様の不満は、著者の近著『インドの時代——豊かさの苦悩の幕開け』（新潮社、2006年）にも感じられた。
- 2) 「サバルタンの公共性」とは、南アジアの公共圏に関する研究で従来看過されてきた非エリート（サバルタン）の担う公共圏や公共性を指す、著者独自の用語である。

（春風社、2005年8月、四六判、384ページ、3,619円〔本体〕）

（うえだ・ともあき 京都大学）